

上越市の高田城跡から南西へ約1.5kmの南本町3。古い街並みに雁木が連なる。江戸時代に春日町と呼ばれたこの地で、明治初期、鮮魚卸の「宮崎海産物店」が産声を上げた。後に富寿しグループを経営する宮崎商店（上越市）の前身

にいがたの老舗 100年の系譜

だ。創業者は宮崎富吉氏。会社の沿革史には、創業は「明治初期」とあるだけで資料は残っていない。上越市立総合博物館の主任学芸員花岡公貴さん(40)は「江戸時代まで魚売買は高田の一部の町でしか認められなかつ

すしを身近に 宮崎商店 (上越市) ①



1905(昭和30)年ごろのマルタ屋。鮮魚のほか、缶詰など食料品も販売していた

た。明治から自由になり、を認める町座制をしいた。商売を始められたのでしょ。これにより魚売買の特権をう」と分析する。一手に握っていたのが田端

上越市史などによると高田町。現在は飲食街として知田藩は城下保護のため、高られる仲町3のあたりだ。田の商人に独占的な営業権。しかし、幕末には藩の力が

陸軍駐屯で商売繁盛

戦後に「富寿し」1号店

会社概要

創業 明治初期
本社 上越市南本町3
資本金 2800万円
社員数 126人
事業内容 「富寿し」、回転すしの「廻鮮富寿し」などを上越市に10店舗、新潟市に2店舗、長野市に2店舗の計14店舗展開。このうち回転すしは4店。上越市で洋風のシーフードダイニング「TOMMY SAY」も運営する。

衰え、保護政策も弱まった。時、食卓に上がるのは肉自由経済の波に乗って同店より魚が主流。商売は繁盛したたろう」と推測する。

1907(明治40)年、

近代産業がまだ育っていない。その後同店は鮮魚のほかかった旧高田町に、陸軍第に食料品も扱う「宮崎食料十三師団の駐屯決定の報が品店」となる。さらに「マ

入る。「いまでいうと霞がルタ屋」と名を変え、個人関の省庁が来るようなも商店として戦中戦後の混乱の「(花岡さん)。軍隊の消期をくくり抜けた。

費を見込んで商人が増え、53年、富吉氏のひ孫の町は活気づく。11年には高故宮崎富一郎氏が株式会社田市が誕生した。

宮崎海産物店は師団の「マルタ屋」を運営する近

近くにあり、花岡さんは「当

立した。富一郎氏は手腕を奮い、事業拡大の礎を築く。

54年には高田駅近くに「富寿し」1号店を開店する。カウンタ7席の小さな店だったが、当時珍しかった冷房機を導入。「いな

がらにして軽井沢の涼しさ」と書いた看板が目を引いた。自動ドアや生ビールサーバーなど目新しい機器を備え、立地のよさも奏功して連日にぎわった。

ほかの鮮魚商とともに出資して一印高田魚市場(現・一印上越魚市場)を創設。建設会社を興したほか、高田市議を二期務め、実業界、地方政界で活躍した。

2代目社長で現会長の正さん(79)は、父富一郎氏について「10年、20年先を見ていた。バイタリティーにあふれていた」と述懐する。

正さんの妻、ミチ子さん(74)も「マルタ屋の名にしたのもカチカチはハイカラだから。気質がよく表れている」と話す。

高度経済成長を背景に、富一郎氏率いる同社の経営は軌道に乗っていく。